

絆 求 め て

1月20日発行

文責 私学振興専門員 久保田学



秋季公開講座質問内容について

令和6年11月16日(土)、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構専務理事の加藤篤彦先生を講師にお迎えし、「秋季公開講座」を松本市勤労者福祉センターを会場に実施しました。その際、以下のような質問が受講された先生より寄せられました。質問内容を読ませていただき、同じようなケースで悩まれた経験をお持ちの先生がいらっしゃるのではないかと思います。以下にまとめてみました。今後の保育の参考としていただけたらと思います。

<質問内容>

子ども達に任せて話し合いを進めていくと、大体、いつも同じ子の意見に決まり勝ち。そのため、保育者が仲介に入らざるを得なくなり、思うような子ども中心の活動が難しい。このような場合どうしたらよいでしょうか。

*以下に、この質問をお書きいただいた先生に、より詳しい状況をお書きいただいたので、合わせてお読みください。

☞質問に書かせていただいたクラスの様子について、お伝えさせていただきます。

本年度、年中クラス14名を受け持っています。4月から定期的に帰りの会の前に『サークルタイム』の時間を設けています。サークルタイムで話している内容としては、例えば祖父母参観が近い時期には、自分たちの祖父母についてそれぞれで発表し合ったり、今年度畑の活動をしてきているので、畑について話をしたりなど、毎回話題が繋がるようにというよりは、その時によって内容を変えて、とにかく「自分の気持ちや思いを言葉にしてお友だちに伝えてみる!」ということに重点を置いてきました。アンケート用紙に書かせていただいた場面としては、このサークルタイムでの話題で、何か決めないといけないという時の事です。

普段から活発な女の子たちは比較的自分から挙手をして意見を発表してくれます。しかし、恥ずかしがり屋な子や質問されていることに対する回答が、あっているような少しずれているような子は、話し合いの中心から遠ざかっているような感じがします。しかし時には、いつもは控えめな子たちが珍しくと言ったら語弊がありますが活発に意見を出してくれることもあります。きっと勇気を出して発言してくれているのだと思います。

しかし、性格の強い子は、自分の考えていた事と違うと、思いっきり自分側の意見に話をまとめようとして、他の子がどんなに良いことを言ってくれてもその意見は採用されません。

私としては、2学期も後半になり、子どもたち主体で話し合いを進めることも上手になってきているので、なるべく保育者は口出しせず子どもたちの様子を見ていたいところなのですが、強い女子たちの好き勝手なやり方が始まると、こちらも黙っているわけにもいかず結局私が仲介し、私主導で話を進めてしまっています。性格の強い子たちには、相手の話をまずは聞く、耳を傾けるように声掛けしていますがそれはその時限りで、次回になるとまた同じことを繰り返しています・・・

加藤篤彦先生からのメッセージ

子どもたちの話し合いは、子どもたちがよりよく園の生活者として、みなが幸せに納得できるように課題を解決するためであると私は考えています。一方で話し合いは、ともすると私たち大人の職員会でさえ、声大きい。強い。権限が高い。などの意見が優先されてしまいがちです。

そこで、研修会でも利用しましたが、意見を付箋に書くというやり方があります。(これは年中児には無理ですけど)「自分の意見が見える化」することで、きちんと意見としてその場に置くことが

できる。ということです。話し言葉は消えてしまいますので、なかったことにもなりかねません。そうすると、強い意見に押されてしまいます。みんなが納得できる解を得ることが大切ですから。意見の見える化は大切にしたいことです。

これを幼児教育の現場で行う一つの手段としては、「グラフィックファシリテート」というやり方があります。ここからは主に年長が対象となりますが、保育者が子どもの意見を代わりにホワイトボード、黒板、静電シート（静電シートは保育者がまとめたものを消さずに残していられるので話し合いのプロセスを振り返るのに有効です。商品はググってください）に絵や字で書いていく（描いていく）という方法です。このことによって、一人ひとりの声を書きとめることができます。もちろん、「いいこと考えた！」と話が脱線することもあります。そのようなときは、そのアイデアは「今の話し合いと違うよ」と外してしまうのではなく、少し脇のほうに書いておいてあげるようにすればよいと思います。声の強い1票より。控え目な2票の方にパワーがでます。

このようにしながらも、大切なのは、「みんなはこれでいいの？」という問いかけ。あるいは、採用されない意見の子に「これでいい？」とか、グループの皆に対して、「どうしてもいやだという子がいるよ。どうしようか。どうしたら、みんなで一つに決められるかなあ」などと、問いを子供に戻すことも話し合うという意味では有効です。ただし、年中さんはまだ相手の意見を尊重するということが向かない発達の段階にありますので、年長さんのようにはできません。一人ひとりの意見を保育者が興味をもって温かく受け止める。強い子も弱い子もみんな同じようにすることが大切です。そのために聞き取る時間の流れも大切で、はっきり意見を言う子が先を急ごうとしたときにも、一人ひとりの意見を大切にしようね。と温かく待つ姿勢がクラスの子どもたちの心を育てる学級経営にも活かされるのではないかと思います。話し合いという方法を使いながら、自分のクラスはみなを大切にしている。子どもは自分を大切にしてもらっているということを学ぶ時間でもあるのだと思います。

加藤先生のメッセージを読ませていただき、「保育者としての言葉がけ」がいかに重要かを感じました。この言葉がけで大切な事は、保育者がファシリテーターとして、いかに一人一人の子どもの思いを引きだし、子ども同士を繋げたり、納得解を見い出したりすることができるかという事であると思うのです。以下は「互いに認め合い、共に学び合う」といテーマで研究したある小学校での研究内容の一部です。教師の姿勢(ファシリテート力)についてふれています。関係ある内容と思いましたので紹介します。

☞「まず、教師自身が、児童にとってよいモデルとなっていきたい。児童の声を聴き、どう応え、反応していくのか。そして、児童の思考を深めるために、どのようにして声かけをし、働きかけ、価値付けていくのか。今一度、教師の姿勢・立ち振る舞いを考えていきたい。児童が教師をモデルとして捉えるだけでなく、児童同士のかかわりの中でもよい関係や言葉のやりとりが生まれる場面もある。そういった場面も教師が逃すことなく価値付けていくことも教師の姿勢として大切なことになってくる。「教師の姿勢」を育てていくためには、日々の授業からの意識付けが大切になる。しかし、日々の中で忙殺されてしまうのも現実である。個々の技量に任せるのではなく、教師集団として協働することが必要になってくる。授業や児童とのかかわりを気軽に見合い、フィードバックし学び合うための場を今までも本校の研究として取り組んできた。本年度も、全教員が授業づくりグループに所属し、一人一授業をし、ミニ研究会を行いながら授業力の向上、教師の姿勢の高め合いを行っていきたい。」

*本年度50を超える園を訪問させていただき、先生方の保育の様子を参観させていただいたり、園長先生や主任の先生方と園の様子についてお話をお聞きしたりしてきました。その訪問を通して「子ども達の主体的な学びのために、保育者の支援はどうあったら良いか」という事に悩んでいる先生が沢山いらっしゃると感じました。私も小・中の教育現場にいた時、同じ悩みを持っていました。義務教育の場合、明確なカリキュラムがあり、終わらせなくてはならないという時間的制約との戦いで、どうしても教え込む教育になりがちです。しかし、「子ども達が納得して活動に取り組めるようにしよう」という事を常としていました。ぜひ保育の悩みを先生方同士が語り合うなかで考えてみてはどうでしょうか。困った時ほど同僚性を大切にしたいですね。 (専門員)